

隠語における倒語の造語法

川上真紀子

【キーワード】 造語法 倒置 省略 隠語

1. はじめに

本稿の目的は、辞書から採集した用例による計量的な分析を踏まえて、造語法の一つである倒語について考察することである。その際、語構成やモーラ配列などを考慮し、また同じ変形的造語法である略語との関連性についても言及することを目指す。

従来倒語に関する研究は、大きく分けて隠語研究の分野と音韻論の分野という二つの流れに従って行われてきた。前者は主に隠語辞典の解題として示されるものが多く、倒置位置についての言及が中心となっている。前田(1922)などは隠語研究の先駆けをなすものだが、

第一音節を取り除いて、アクセントの加はつて居る音節を第一に置き換え、若しその下になほ他の音節が付属して居る場合には、それをその儘採用して、さて終りに上に残して置いた第一音節(中略)等を附加すればよいのである。(p.192)

のように倒置位置について既にかなり詳しく記述されており、その後榎垣(1986)等の各隠語辞書・集団語辞書へと引き継がれていく。ただし、これらの研究は採録語の概観を述べるという形態をとっており、数量的な考察に重点がおかれているとは言い難い。

もう一つの音韻論における研究は、倒置の法則を音韻規則から説明しようとする比較的新しい研究で、Tateishi(1989)やIto他(1996)などに詳しい。ここでは倒語の形成規則として重要な指摘が多数みられるが、特にIto他(1996)における次の二点の指摘は従来の隠語研究における記述にはなかった注目すべきものである。

- ・「F+F(フット+フット)」形式か、「F+L(フット+軽音節)」形式を持っている。それ以外の形式は許容されない。
- ・韻律的タイプはその原語の韻律形式によって決定される。

(p.220 要約)

また、これらの形成規則に従って原語のモーラ数と倒置パタンの対応関係を一般化して示すことに成功している。

Tateishi (1989) を初めとするいわゆる「ズージャ語」(「業界用語」とよばれる隠語の一種で、倒置によってつくられる遊戯的な語)を対象とした音韻論の分析によると、原語が2モーラ以下の場合何らかの挿入が行われ倒置は3モーラになるという指摘があるが、広い範囲の隠語を扱う本調査では78例が「ぎさ〔詐欺〕、だふ〔札〕」のようにそのまま2モーラの倒置を形成するものだった。ちなみにモーラの挿入が起こっている語は以下の6例のみである。

しーめ〔めし〕 ズージャ〔ジャズ〕 たーう〔歌〕
 ツーシャ〔シャツ〕 ねーか〔金〕 びーた〔旅〕

② 3モーラ語 128例

3モーラ語の倒置パターンは【表1】のようになっている。

【表1】 3モーラ語の倒置パターン (カッコ内の数字はパーセント)

| 原語のモーラの移動 | 132 | 213 | 231 | 312 | 321 | 計 |
|-----------|------------|--------------|--------------|--------------|-------------|----------------|
| 語数 | 1 (0.8) | 18 (13.5) | 45 (34.9) | 54 (42.9) | 10 (7.9) | 128 (100.0) |
| うち活用語数 | 0 | 8 | 5 | 1 | 0 | 14 |

最も多くの用例があるのは、第3モーラを先頭に移動させる312型(ビテレ〔テレビ])で、次いで231型(すりく〔薬])となっている*1。

活用語に関して煤垣(1986)には、

動詞や形容詞のような活用語では、活用語尾はそのままにして、はじめの二音節を逆にする方法をとらざるを得ない。(p.489)

との指摘があり、確かに3モーラ目の位置を移動しない213型での活用語数の占める割合は高くなっている。しかし、「かいた〔高い〕・さいく〔くさい〕」のように、この指摘にあてはまらない例もみられる。これらは、実際には接辞をつけ「かいたい・さいくい」のような語形となり活用語として機能しているようである。

④ 4モーラ語 103例

4モーラ語の倒置パターンは【表2】の通りである。

【表2】 4モーラ語の倒置パターン

| 原語のモーラの移動 | 2314 | 3124 | 3214 | 3412 | 3421 | 4123 | 4312 | 4321 | 計 |
|-----------|------------|------------|------------|--------------|------------|------------|------------|------------|----------------|
| 語数 | 1 (1.0) | 1 (1.0) | 1 (1.0) | 93 (91.3) | 2 (1.9) | 1 (1.0) | 3 (2.9) | 1 (1.0) | 103 (100.0) |
| うち活用語数 | 0 | 0 | 0 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 |

理論的には23通りのパターンが可能だが、第1モーラ的位置を変更しない例はなかった。②の3モーラ語のパターンでも第1モーラを移動させないものは孤例であ

これらの先行研究を踏まえ、本調査では辞書から採集した約 500 語の隠語の例をもとに、倒語の造語法に関する報告を行う。具体的な内容としては、「2.」で本稿における倒語の定義と作業方法について説明し、「3.」ではモーラの省略や挿入を伴わない倒語に限定して外面的な倒置パタンの概観を報告する。また、倒置に重要な影響を与えると音韻論で指摘されている特殊拍の含まれる状況について「4.」で考え、「5.」では変形的造語法の仲間である「略語」との関連について述べることとする。

2. 調査の概要

2.1 本調査における「倒置」「倒語」

金田一他（1988）、国語学会（1980）の記述に従い、本調査における「倒置」および「倒語」を次のように定義する。

既存の語彙成分のモーラ配列を一部転換することを「倒置」とし、それによって生産される語を「倒語」とする。ただし、倒置に付随して、モーラの挿入や削除、音訛の発生、他の成分との合成などが起きる場合があるが、そのような現象を伴うものも「倒語」に含むこととする。

2.2 調査環境

用例採集は木村・小出（2000）および米川（2000）から行う。一つの原因から複数の倒語がつくられる場合は、それぞれを別の例として採集する。ただし、同じ原因に音訛のある倒語とそうでない倒語の二つがある場合（例：どい・どえ〔江戸〕）は、音訛の無いもの「どえ」だけを採集する。原因が 1 モーラの語は採集しない。

以上の規則に従って作業を行った結果、分析対象として採集された総用例数は 504 語となった。内訳は、倒置単独の造語によるものが 311 例（2 モーラ語 78 例、3 モーラ語 128 例、4 モーラ語 103 例、5 モーラ語 2 例）、省略や合成といった造語法と組み合わさって倒語がつくられるものが 193 例である。

3. 倒置単独の造語における造語法

3.1 倒置パターン

倒置の性質を鮮明に見るために、ここではまずモーラの挿入・削除や合成を伴わない倒語のみを扱い、倒置パターンを観察する。

原因および倒語のモーラを仮名単位の連続として扱い、一つの仮名に相当する 1 モーラ（拗音はこの限りではない）が原因のどの位置から倒語のどの位置に移動したかを示すと、各モーラ数ごとに下記のような傾向が見られる。

① 2 モーラ語 78 例

2 モーラの場合、当然ながら倒置パターンは 1 通りしか考えられない。

る(たかん〔啖呵〕のみ例外)ことからわかるように、倒置とは第1モーラの位置を入れ替えることが原則となっていると考えられる。

4モーラ語は3モーラ語以上にパタンの偏りが目立ち、原語の中心で二つの成分に分離し、それをそのまま前後で入れ替える3412型(ざいまん〔漫才〕・さきむら〔紫〕)への集中が91.3パーセントと突出している。活用語であってもこの傾向に揺るぎはなく、第4モーラの位置を保存しようという意識はあまり影響していないようである*²。

3.2 形態素と倒置法の関連

さて、3.1では外見的な倒置パターンを示したが、この入れ替えの箇所は原語の語構成と何らかの関係があるのだろうか。

① 2モーラ語

2モーラ語において、2形態素から成るもの、および1形態素だが表記の面から何らかの分離意識が働くと仮定できる原語は60例、分離意識が働かないと思われる原語は18例であり、単一形態素であることが倒置を阻害しているとは限らない。

② 3モーラ語

3モーラ語の原語で分離意識があると思われるものは66例、分離意識が無いと判断されるものは48例あるが*³、それぞれにおける倒置パタンの内訳を見ると【表3】の通りになっている。

【表3】 3モーラ語における形態素の切れ目と倒置パターン

| 原語のモーラの移動 | | 132 | 213 | 231 | 312 | 321 | 計 |
|-----------|------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| 分離あり | ○/○○ | 0 (0.0) | 1 (10.0) | 20 (50.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 21 (18.4) |
| | ○○/○ | 1 (100.0) | 1 (10.0) | 2 (5.0) | 39 (73.6) | 2 (20.0) | 45 (39.5) |
| 分離なし | | 0 (0.0) | 8 (80.0) | 18 (45.0) | 14 (26.4) | 8 (80.0) | 48 (42.1) |
| 計 | | 1 (100.0) | 10 (100.0) | 40 (100.0) | 53 (100.0) | 10 (100.0) | 114 (100.0) |

※○は1モーラに相当する仮名1文字を表す。

網掛けの部分が分離意識に沿った倒置法なので、分離意識がある場合はおおむね形態素や表記の切れ目と同じところに倒置の境界が設定されていると言える。

さて、倒置パターン別の傾向を見ると、231型は「○/○○」にも「分離無し」にもそれぞれ20例・18例とほぼ同数の語例があるのに対し、312型のパターンは「○○/○」の原語からの倒置に著しく数が集中している(53例中39例, 73.6%)。この39例という数字は活用語でない3モーラ語全114例のうち31.5パーセント

を占めるものであり、したがって〇〇/〇という構造を持つ原語から 312 型の倒置を起こすパターンが、3 モーラ倒語の造語において主要な位置を占めていることがわかる。また、このパターンでは特殊拍の存在が重要な役割を果たしているのだが、それについては次の「4.」で詳しく述べることにする。

③ 4 モーラ語

4 モーラの原語は 2 モーラ目の後ろに分離意識のあるものが圧倒的に多く、それぞれの倒置パターンの内訳は【表 4】の通りになっている。

【表 4】 4 モーラ語における形態素の切れ目と倒置パターン

| 原語のモーラの移動 | | 2314 | 3124 | 3214 | 3412 |
|-----------|-------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 分離あり | 〇/〇〇〇 | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (1.1) |
| | 〇〇/〇〇 | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (100.0) | 75 (84.3) |
| | 〇〇〇/〇 | 0 (0.0) | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 2 (2.2) |
| 分離なし | | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 11 (12.3) |
| 計 | | 1 (100.0) | 1 (100.0) | 1 (100.0) | 89 (100.0) |

※〇は 1 モーラに相当する
仮名 1 文字を表す。

| 3421 | 4123 | 4312 | 4321 | 計 |
|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 0 (0.0) | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (2.0) |
| 1 (100.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 77 (78.6) |
| 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (33.3) | 0 (0.0) | 4 (4.1) |
| 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (66.7) | 1 (100.0) | 15 (15.3) |
| 1 (100.0) | 1 (100.0) | 3 (100.0) | 1 (100.0) | 98 (100.0) |

当然ながら、分離意識に沿った倒置の 3412 型への著しい偏りが見られる。分離意識が無いと判断される「ヒーコー [コーヒー]」のような例であっても、あるいは「がいまち [間違い]」のように原語の切れ目にそぐわなくても 3412 型をとっている例が散見される。このような集中は、一つには、4 モーラ語の多くが漢語を中心とした二つの形態素意識が働く語を原語としているために、それを単純に前後に入れ替える方法が好まれるからだろう。もう一つには、窪菌 (1995) 等ではしばしば指摘されている 2 モーラ単位論 (bimoraic foot) 説によって原語の内部構造がとらえられているという理由が推測できる。

4. 重音節の役割

4.1 特殊拍と倒置の関係性

音韻規則による分析が倒語研究における音韻論からの主要なアプローチであることは既に述べた。この音韻規則では、音節の軽重を判定することが記述の前提条件となっている。では、隠語の倒語において重音節を形成する特殊拍はどのように分布しているのだろうか。3モーラ語・4モーラ語におけるそれぞれの型分布は【表5】【表6】のようになっている。

【表5】3モーラ語における特殊拍を含む語

| 原語のモーラの移動 | 132 | 213 | 231 | 312 | 321 | 計 |
|--------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| 撥音を含む | 1 (100.0) | 2 (11.1) | 12 (26.7) | 21 (38.9) | 2 (20.0) | 38 (29.7) |
| 長音を含む | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (1.9) | 2 (20.0) | 3 (2.3) |
| 促音を含む | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (20.0) | 2 (1.6) |
| 二重母音の第二要素を含む | 0 (0.0) | 8 (44.5) | 14 (31.1) | 14 (25.9) | 1 (10.0) | 37 (28.9) |
| 3モーラ語数 | 1 (100.0) | 18 (100.0) | 45 (100.0) | 54 (100.0) | 10 (100.0) | 128 (100.0) |

【表6】4モーラ語における特殊拍を含む語*4

| 原語のモーラの移動 | 2314 | 3124 | 3214 | 3412 |
|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 撥音を含む | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 1 (100.0) | 37 (39.8) |
| 長音を含む | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (21.5) |
| 二重母音の第二要素を含む | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (100.0) | 0 (0.0) |
| 4モーラ語数 | 1 (100.0) | 1 (100.0) | 1 (100.0) | 93 (100.0) |

※3214型の例は、撥音と二重母音の第二要素両方を含む語。

| | 3421 | 4123 | 4312 | 4321 | 計 |
|--|--------------|--------------|--------------|--------------|----------------|
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 39 (37.9) |
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (19.4) |
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (0.1) |
| | 2 (100.0) | 1 (100.0) | 3 (100.0) | 1 (100.0) | 103 (100.0) |

4.2 撥音の多数型パターンに与える影響

撥音の含有率は3モーラ語で29.7パーセント、4モーラ語で37.9パーセントと高い値を示している。4モーラ語は3412型に語数が集中しているのでこの表から注目すべき点を見出すことはできないが、3モーラ語においては213型の11.1パーセントに対する312型の38.9パーセントなど、やや偏りが見られる。

【表7】3モーラ語における撥音の位置とその移動

| 原語のモーラの移動 | 132 | 213 | 231 | 312 | 321 | 計 |
|-----------|--------------|------------|--------------|--------------|------------|--------------|
| ○NO | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 21 (38.9) | 2 (5.0) | 24 (18.8) |
| ○○N | 0 (0.0) | 1 (5.6) | 12 (26.7) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 13 (10.2) |
| 計 | 1 (100.0) | 1 (5.6) | 12 (26.7) | 21 (38.9) | 2 (5.0) | 37 (28.9) |
| 3モーラ語全数 | 1 | 18 | 45 | 54 | 10 | 128 |

【表8】4モーラ語における撥音の位置とその移動

| 原語のモーラの移動 | 2314 | 3124 | 3214 | 3412 |
|-----------|--------------|------------|--------------|--------------|
| ○NO○ | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 15 (16.1) |
| ○○NO | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) |
| ○○ON | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 1 (100.0) | 20 (21.5) |
| ○NON | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (2.2) |
| 計 | 1 (100.0) | 0 (0.0) | 1 (100.0) | 37 (39.8) |
| 4モーラ語全数 | 1 | 1 | 1 | 93 |

※Nは1モーラに相当する撥音を表す。

| | 3421 | 4123 | 4312 | 4321 | 計 |
|--|------------|------------|------------|------------|--------------|
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 15 (14.6) |
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) |
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 22 (21.4) |
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (1.9) |
| | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 39 (37.7) |
| | 2 | 1 | 3 | 1 | 103 |

では、撥音が原語のどこにあったのかを見てみると（原語に特殊拍が無く音訛によって倒語に撥音が発生した場合は対象から除く）、原語における撥音の位置は【表7】【表8】のとおりである。Nは撥音の部分で○と同じ長さの拍を示す。撥音を含む3モーラ語で注目すべきは、312型においては38.9パーセント（54例中21例）が、更に言えば全3モーラ倒語の16.4パーセント（128例中21例）にもなる数が「なおん〔女〕、わでん〔電話〕」のように○○N〔ON○〕、すなわちLH構造というモーラ配列の語であることである。

3モーラ語と同じく、撥音を含む倒置にはかなり固定的なパタンが浮かび上がってくる。すなわち、全体の14.6パーセント（103例中15例）が「だいせん〔仙台〕」のような○○○N〔ON○○〕、19.4パーセント（103例中20例）が○N○○〔○○○N〕という配列である。これらが全て3412型であることから、後要素が撥音となる2モーラのフット「ON」が4モーラ語の倒置においては重要な役割をはたしているということがわかるだろう。

5. 他の変形的造語法との関わり

5.1 省略と倒置の順序

倒置と同時に省略が起こっている例は、全61例（2モーラ27語、3モーラ27語、4モーラ7語）である*⁵。原語の何モーラ目が削除され、さらに原語のどこのモーラが倒置しているのか、というパタンについては、61例という少ない数からではバラつきが多く、法則性を見出すことはできない。しかし、削除されずに残った部分だけ（例えば「さけつ〔警察〕」の場合なら原語の第2モーラ「い」を削除した配列「けさつ」に数字を振り「さけつ」は213型と判断する）で考えてみると、以下のような傾向が見られる。

3モーラ語…132型 0例, 213型 8例（うち活用語数2）
 231型 10例, 312型 8例, 321型 1例
 4モーラ語…3412型 6例, 2341型 1例

この数字を見ると、「3.」で考察した倒置のみの造語法における倒置パタンと似通った分布を示していることがわかる。これだけの少数例で断言することは難しいが、省略と倒置という二通りの変形的操作を行う造語では、最初に省略が起こり、その残された部分で倒置が行われていると考えるのが自然ではないだろうか。

5.2 削除される要素

さて、倒置に併行して行われる省略において、78.7パーセント（61例中48例）の例は削除されるモーラ数が1モーラである。3モーラ原語からは2モーラ倒語が、4モーラ原語からは3モーラ倒語がつくられる。ただし、4モーラ倒語の原語に限ってみると、2モーラ以上が削除される例も多い。これは、原語となる5

モーラ以上の語は複数の形態素が複次結合している場合がおおいため、その形態素をまるごと削除する省略法が好まれるからであると考えられる。

また削除されるモーラは重音節の第二要素，すなわち単独で音節を形成していないモーラである場合が多く，1モーラのみが省略される48例では【表9】のように65パーセント近くにのぼっている。特に，原語に重音節が含まれるものだけに限定して見ると，79.5パーセント（39例中31例）が重音節第二要素の削除となっている。その削除対象となる特殊拍の内訳は【表10】の通りである。

【表9】倒語における被削除モーラの性質

| 原語の構成 | | L | H第一要素 | H第二要素 | 計 |
|------------|------|----|-------|-------|----|
| 3モーラ 原語 | HL | 0 | 1 | 10 | 11 |
| | LLL | 9 | 0 | 0 | 9 |
| 4モーラ 原語 | HH | 0 | 0 | 11 | 11 |
| | HLL | 3 | 0 | 5 | 8 |
| | LLH | 1 | 1 | 2 | 4 |
| | LHL | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | LLLL | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 5モーラ 原語 | HHL | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | LHH | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 計 | | 15 | 2 | 31 | 48 |

※Hは重音節，Lは軽音節を表す。

【表10】倒語において被削除モーラとなる特殊拍

| 被削除モーラ | 撥音 | 促音 | 長音 | 二重母音 第2要素 | 特殊音素 合計 |
|--------|----|----|----|--------------|------------|
| 3モーラ原語 | 1 | 3 | 4 | 2 | 10 |
| 4モーラ原語 | 3 | 2 | 10 | 4 | 19 |
| 5モーラ原語 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| 計 | 4 | 5 | 16 | 6 | 31 |

発表者の行った略語の調査においても，原語の1モーラが削除されて略語が形成される例が68例あった*⁶が，これらの被削除モーラの性質は【表11】の通りであり，特に重音節の第二要素が目立って削除されているという傾向は見られない。また，倒置に伴う省略では8割近くが1モーラ削除なのに対し，略語の調査では全6040例もの語数を扱っているにもかかわらず，1モーラ削除がわずか68例であった*⁷ことも注目に値する。すなわち，略語の造語における省略と，倒語の造語における省略とは性質や目的が異なっているのではないだろうか。従来から，略語における省略目的の大きな要因の一つは，外来語や団体名称などの長すぎる語形を日本語らしいモーラ数に調整するためであるとされてきた。しかし

倒語に関して起こる省略は、語形の短縮という目的のほかに、音韻論で分析されているようなモーラ配列を調整しようとして行われているものが多いのではないだろうか*⁸。

【表 11】略語における被削除モーラの性質

| 原語の構成 | | L | H第一要素 | H第二要素 | 計 |
|--------|-------|----|-------|-------|----|
| 2モーラ原語 | H | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | LL | 3 | 0 | 0 | 3 |
| 3モーラ原語 | HL | 0 | 1 | 2 | 3 |
| | LH | 3 | 0 | 3 | 6 |
| | LLL | 31 | 0 | 0 | 31 |
| 4モーラ原語 | HH | 0 | 0 | 3 | 3 |
| | HLL | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | LHL | 5 | 0 | 0 | 5 |
| | LLH | 2 | 0 | 1 | 3 |
| | LLLL | 3 | 0 | 0 | 3 |
| 5モーラ原語 | HHL | 2 | 0 | 0 | 2 |
| | HLLL | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | LHH | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | LLHL | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | LLLH | 1 | 0 | 1 | 2 |
| | LLLLL | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 8モーラ原語 | LLHHH | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 計 | 計 | 56 | 1 | 11 | 68 |

※Hは重音節，Lは軽音節を表す

6. まとめ

以上、隠語辞書から採集したおよそ 500 例の倒語をもとに行った分析を報告した。

倒語は少数の 5 モーラの例を除いて、ほぼ全てが 2～4 モーラの長さを持っている。3 モーラ語における倒置パターンは 312・231 型が多く、ついで 213・312 が続いており、原語での形態素の切れ目が倒置の境界線とおおむね一致している。4 モーラ語の倒置パターンは 3412 型という多数型への集中が著しく、原語の語構成の影響も少ない。

倒置では重音節が重要な役割を果たしている。特に撥音は多数型への影響が強い。すなわち、3 モーラ語における ○○N [○N○] および 4 モーラ語における ○○○N [○N○○]・○N○○ [○○○N] という構造が倒置では非常に好まれていることになる。

同じ変形的造語法である省略との関係を考えると、倒置と省略が併行して一つ

の語を形成する場合「まず省略を行ってから倒置する」と考えると、省略を伴わない倒置パターンにうまくあてはめることができる。また、倒語における省略の被削除要素は1モーラが多く、しかも長音が削除される例が顕著である。これは略語における被削除要素の性質とは異なるので、略語のための省略と倒語のための省略とでは目的や役割が同じではないと判断される。

【注】

- * 1 Ito 他 (1996) でのズージャ語に関する考察によれば、原語が3モーラ語の場合倒語も常に3モーラとなり、それは完全逆転（最後の2モーラが最初の1モーラと入れ替わるもの。本稿でいう312型）と、不完全逆転（第1と第3モーラが位置をかえ、第2モーラは動かないもの。本稿でいう321型）のパターンが存在するとされ、次のような対応関係が示されている（Lは軽音節をHは重音節を表す）。

原語 L L L → 倒語 L L L（完全）
 " → 倒語 L L L（不完全）
 原語 L H → 倒語 H L（完全）
 原語 H L → 倒語 H L（不完全）

ズージャ語においては312型に相当する対応関係は主要な倒置パターンとして扱われていないが、本調査の隠語ではこのような調査結果となった。

4モーラ語に関して提示されている対応関係は以下の通りである。

原語 L L + L L → 倒語 L L + L L
 原語 L L + H → 倒語 H + L L
 原語 H + L L → 倒語 L L + H
 " → 倒語 L L + L L
 原語 H + H → 倒語 H + H
 原語 L H L → 倒語 H + L L

- * 2 5モーラ語は「ムードンコ〔コンドーム〕」「わいかそう〔かわいそう〕」の2例。合成が起こるもの以外で6モーラ以上の語は採集されなかった。
- * 3 活用語を除いた数字。4モーラ語の【表4】も同様。
- * 4 4モーラ語には促音を含む例はなかった。
- * 5 倒置・省略と同時に合成の起こっている例もこの他に以下の13例があるが、倒置と省略との関連性を考察したいので、ここでは分析対象から除外する。

げそろく〔げそ+ふくろ〕、ツンプラ〔パンツ+ブラ〕、
 なおこまし〔女+こまし〕、なおさん〔女+さん〕、なおすけ〔女+すけ〕
 なおだれ〔女+だれ〕、なおちらし〔女+ちらし〕、なおでん〔女+でん〕
 なおはくい〔女+はくい〕、なおもろ〔女+もろ〕、
 べこつく〔神戸+つく〕、べこながす〔神戸+ながす〕、

もりこひき [こうもり+ひき]

- * 6 詳しい調査方法は拙稿 (2002) 参照。
- * 7 語形利用の省略法による略語で、かつ省略形造語成分が単独で略語となっているものに限る。また、略語のデータ採集の際も倒置が付随する例を採集したが、それらはこの 68 例からは除外した。
- * 8 モーラの挿入が起こっている例は以下の 17 例のみである。

| 2→3 モーラ | 2→4 モーラ | 3→4 モーラ | 4→5 モーラ |
|------------|-----------|------------|---------|
| しーめ [めし] | でーはー [派手] | しいかれ [彼氏] | かいつまる |
| ズージャ [ジャズ] | | しんばら [ばらし] | [つかまる] |
| たーう [歌] | | ふうこう [甲府] | とうしろう |
| ツーシャ [シャツ] | | むいさい [寒い] | [しろうと] |
| ねーか [金] | | やあとこ [床屋] | わいこがる |
| びーた [旅] | | やほんや [本屋] | [こわがる] |
| | | ろっぷく [袋] | |

【文献】

- 榎垣 実 (1986) 『隠語辞典』3 2 版, 東京堂出版
- 川上真紀子 (2002) 「造語成分からみた語の省略法の類型化」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47 号第 3 分冊
- 金田一春彦ほか編集責任 (1988) 『日本語百科大事典』, 大修館書店
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』日英語対照研究シリーズ (3), くろしお出版
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』, 東京堂出版
- 前田太郎 (1922) 『外来語の研究』, 岩波書店
- Ito, Junko (1990) “Prosodic minimality in Japanese,” Chicago Linguistic Society 26-II: papers from the Parasession on the syllable in phonetics and phonology,
- Ito, Junko, Yoshihisa Kitagawa, and Armin Mester (1996) “Prosodic Faithfulness and Correspondence: Evidence from a Japanese Argot,” Journal of East Asian Linguistics 5
- Tateishi, Koichi (1989) “Theoretical Implications of the Japanese Musician’s Language,” WCCFL 8, 384-398

【資料】

- 木村義之・小出美河子編 (2000) 『隠語大辞典』, 皓星社
- 米川明彦 (2000) 『集団語辞典』, 東京堂出版

(かわかみ まきこ / 文学研究科日本文学専攻 博士後期課程 3 年)